別冊 Lightning

for tasty life
エイムック1449
別冊Lightning
Vol.46

ニッポン旧車!
VINTAGE AUTO 11

セオリーなんてない
ヴィンテージカスタムで
楽しむ旧車ライフ。

ただいま人気急上昇
510大特集。

懐かしく新鮮
名車セダン大集合。

chapter_01

"比較試乗リポート!"
SR20 搭載の510
3台3様の
ブルーバーズ

contents

chapter_02 …… 特大タービン装着でドラッグレーサーに変身! 目標はナント9秒台!
model_ 1971DATSUN510 DRAG RACER

chapter_03 …… 13Bストリートポート搭載! ビュンビュン走る日産とマツダのハイブリッド
model_ 1971DATSUN 510 with RE

chapter_04 …… DATSUN BROS×DATSUN BOYS Vol.8
人気沸騰スペシャル企画!

VIVA! World of Blue birds

永遠不滅のマルチタレント、ブルーバード は楽しい!

text/K.Yamazaki 山崎和彦　photo/T.Sakurai 桜井健雄　取材協力/ロッキーオートphone0564-58-7080

1.効率よくターボパワーを引き出すためのポイント、インタークーラーはご覧の位置に外付けされている。思わずニヤリの部分だ。2.3.装着ホイールはワタナベで、フロントリアともに6J-14を履く。タイヤはフロントが185/60リアは195/60となっている。4.ステンレス製のエキゾーストシステムはロッキーのオリジナル。ターボ車お約束のトータルチューンの一貫となっている。5.けして見せかけだけじゃない、大きなウイングはターボ車の高速時のスタビリティを確保する。6.室内にはエアコンユニットが鎮座する。効きは強力で、ガラスエリアの広い室内をガンガン冷やす。

STYLE_01

ターボパワーでいつでも、どこからでも一気に強烈加速！

3台のSR20搭載510一気乗り、1台目はこのターボ仕様だ。ミッションはもちろん、パワステやエアコンまでをもS13シルビアから移植したマシンはズバリ、かなり面白いジャジャ馬ぶりを発揮する。

一旦走りだして時速40キロを超えてしまえば、ギヤが何速だろうが坂道だろうが、とにかくアクセル一発でバビュンッ！と加速する。それはいわゆるタメのあるドッカンターボとも違う不思議な感覚だ。軽い車体はブーストがかかる手前からきっちり加速態勢に入り、フルブーストでそこからまた一気に加速するわけで、その結果異次元感覚の乗り物となっている。最初はやや掴みどころのない印象も受けるが、走り込むにつれてこの超ジャジャ馬をきっちり乗りこなすテクを探る楽しみが見えてくる。もちろんこのエンジンを使い切るための足周りもしっかりできており、この状態をベースにオーナーの好みや用途に応じていかようにもアレンジすることが可能だという。最強ストリート仕様を目指すのもいいし、それこそサーキットでガシガシ走れる本格的なレーシング仕立てを追求するのも楽しいだろう。しかも驚くなかれ、強烈エアコンユニットで真夏の快適ドライブも確保されているのだ。ビンテージカーによる〝自走でのサーキット遊び〟を企てている方にも面白い1台である。

当然ながら今回試乗した3台の中では最もパワフルな510で、そのポジションは別格。BMWのマルニにもTiiやキャブがあり、別モノとしてターボがあったことを思い出してしまった。

見せることを意識して製作されたエンジンルームは、好き者の心をくすぐるのに十分だ

VIVA! 永遠不滅のマルチタレント ブルーバードは楽しい！
World of Blue birds.

3台3様、同じエンジンながらそれぞれのキャラクターの違いを確かめることができた。

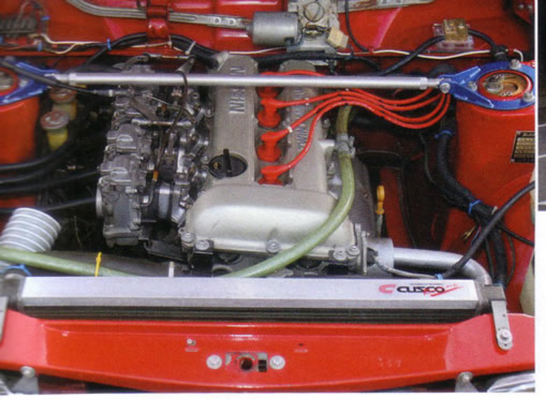
一瞬バックミラーに写ったマスクを確認すれば、ふつうに仕上がったきれいな510に見える。しかしながら「ああ、懐かしいな〜」と気を抜いた瞬間、あっという間にその後ろ姿を見せつけられることになる。ターボパワーで武装された510は、トータルチューンが施され、高いレベルのヴィンテージカスタムをクリアしていた。カリフォルニアにはまだまだ数多く存在する510ではあるが、国内で程度のよいものを探そうとなると、けっこう真剣にならなければ見つからない状況になりつつある。この永遠の美を放つセダンの人気が今後さらに高まっていくのは火を見るよりも明らかだ。

エクステリアは一見おとなしそうにも見えるが、BREタイプのフロントスポイラーと大きなリアスポイラーでハイパーマシンであることをアピールしている。4ドアの速いハコの美学がここに集約されている。

chapter_01

"比較試乗リポート！"
SR20 搭載の510
3台3様の
ブルーバーズ

510 with SR20 DET



始動性、アイドリング時の安定性、全域に渡るレスポンスのよさ、そしてもちろん胸のすく全開時のパワー感と、スポーツキャブ車としての優等生ぶりを堪能できるのは、当然ながら電気系や排気系といった様々な要素がトータルでチューニングされているからに他ならない。安心して踏めるハイパー510は大人の遊び道具として高い評価に値する。

にしてあるということだ。ここからさらにユーザーの趣味志向に応じて様々なレシピによるキャブ料理が可能であるという。

あえて趣味性の高いキャブ装着車を選んで、自分好みにセッティングしていくのも大人の趣味といえよう。

1. キャブにフレッシュエアを供給するダクト。レーシーなモディファイだ。2.BREカラーは510のエクステリアを決めるうえでのお約束。3.装着されたキャブはMSRのφ45。4連想された様は大型バイクのようだ。4.インテリアもレーシーな仕上げ。巨大なタコがポイントだ。5.マフラーはオリジナルのステンレスを装着する。6.ホイールは前後ともワタナベの15インチを装着している。ブレーキチューンもぬかりはない。

STYLE_02

キャブの吹き上がりはネバリのあるトルク感あり大人のスポーツテイストだ

VIVA! 永遠不滅のマルチタレント ブルーバードは楽しい!
World of Blue birds.

CHAPTER_01

"比較試乗リポート!"SR20搭載の510 3台3様のブルーバーズ

ガオッガオッと煽ってきっちりと回転を合わせてシフトダウン、再び床まで踏んでフル加速と、そんなリズミカルなドライブがとても楽しい!

さて2台目の510は、SR20DEをベースにMSRφ45キャブレターを装着、点火系もCDIの同時点火とし、排気もステンマフラーで武装したツウ好みの1台だ。

アクセルにちょこっとだけ足を乗せて固定し、キーを捻ってセルを回し、火が入った瞬間にガオッとやや素早く踏み込む。不用意に加速ポンプでガブ飲みさせないように気を遣いながらの儀式は、このテのクルマにだけ与えられた"特権"だ。そう、このちょっとした手間を嫌うようであれば、そもそもこのクルマに乗る資格などないと、そう言いきってもいいだろう。つまり、今の時代にあえてキャブのテイストを味わおうというのだからそれ相応の構えは必要で、そこに楽しみを見出せないのであれば趣味としてキャブ車に乗る意味はなくなってしまうだろう。

そんなことはさておき、このクルマ、正直言って本当に楽しいのだ。まず、走る前にアクセルを煽るだけでワクワクする。キャブらしい、少しだけタメのある吹き上がりは50オヤジを妙に納得させるに足る趣味性を感じる。さらに、いざ走り出すと各ギアでそれぞれのトルク感を別々に楽しめるのがいい。1速ごとに引っ張りながら胸のすく加速を味わうのもいいし、やや早めにシフトアップして、右足に集中しながら加速トルクを感じる、いわゆる"合わせ"の妙を堪能することもできる。

取材車はこの状態でもかなり楽しめるが、ショップいわく多くのオーナー候補に理解していただけるように、わりとイージーなセッティング

510 with SR20 DE&MSR45

BREカラーにペイントされた510は、その外観だけではなく内容もまた実にマニアックな仕様となっていた。バイク用に開発された高性能4連キャブレターとSR20のマッチングは、実に楽しい趣味性を発揮する。まめにギヤをセレクトしながら大小のワインディングを自由自在にドライブングする様子はまさにスポーツ! ヴィンテージとかブルーバードとか言う以前の、"元気なハコでの楽しいドライブ"という原点を感じることができた。

1.あまりにもすんなりコンバートされているので、まるでこれがノーマルのような印象を受ける。エンジンはノーマルインジェクションとはいえSR20なわけで、安定した中低速はもちろんのこと、いざ回転を上げれば過激な走りも満喫できる。2.ローバックながらバケット形状のコブラシートでクラシカルなスポーティさを演出している。3.アメリカでは絶大な人気を誇るクーペテールも今では希少なアイテムとなっている。純正のメッキバンパーの程度もすこぶる良好だ。4.ホイールはテクノレーシングのアルミで、前後共に6Jを履く。タイヤサイズは前後共に185/60-14となっている。5.メーターパネルはカーボン素材を使ってスパルタンなイメージを演出している。

VIVA! World of Blue birds.

永遠不滅のマルチタレント
ブルーバードは楽しい!

CHAPTER_01

"比較試乗リポート!"SR20搭載の510
3台3様のブルーバーズ

今回の企画の中で、最後にドライブしたのがこの純正インジェクション仕様だ。S13シルビアの心臓部がそのまま移植された510は、その予想通りに実に乗りやすい仕上がりとなっている。無造作にキーを捻ってもフツーに始動し、渋滞路だろうが高速だろうが何の心配もせずにノーマルのマニュアルミッションで快適なドライブが楽しめる……と、ちょっと待てよ、これっておかしくないか!? そう、私はいつの間にかこの昭和47年製の510を今の感覚で乗っているぞ!

と、我に返って改めて感動した。

そう、この35年も前に生を受けたクルマがロッキーマジックによってまったく今の感覚で乗れるイージードライブカーに仕上がっているのだ。しかも、その快適性に純正のクーラーユニットが拍車をかける。もちろん効きも良好で、最新のコンプレッサーを使って当時の室内ユニットを活かした粋な作りとなっていた。

外観は多くの510好きが好むスポーティな仕上がりになってはいるが、あえてノーマルの雰囲気に戻して、日常の足として乗りこなすのもお洒落だろう。もちろん女性にもお薦めの510である。

DATSUN 510 Three Bluebirds Specifications

	STYLE1	STYLE2	STYLE3
ベース車両	1970 1800SSS	1968 1300DX	1972 1400DX
搭載エンジン	SR20DET	SR20DE	SR20DE
吸気系	純正ターボ	MSRキャブφ45	純正インジェクション
ホイール	ワタナベF/R 6J	ワタナベF/R 6.5J	テクノR F/R 6J
タイヤサイズ	F185/60-14 R195/60-14	F195/50-15 R195/55-15	F/R 185/60-14
その他	エアコン・パワステ	CDI同時点火	純正クーラーユニット
車両本体価格	258万円(公認済)	258万円(公認別途)	218万円(公認別途)

●取材協力/ロッキーオートphone0564-58-7080

STYLE_03

安心インジェクションでイージードライブ女性にも乗れるビンテージ

510 with SR20 DE

「中身が今のクルマで、外装が昔のクルマがあればいいのにね」といった話はよく耳にするもの。もちろん現実性という意味では難しいことではあるが、一部ユーザーの正直な意見であることも事実。この510は動力性能においてそういった発想に近い仕上がりとなっている。

SCENE 2

目指せ公道最強NAで目標380馬力!?

ROCKY"Z Top" Project

第4回

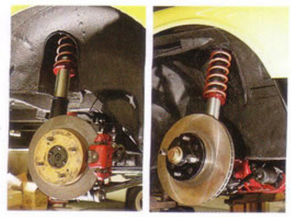
エンジン搭載完了！足周りもきっちりきめておりますですの巻

text/K.Yamazaki 山崎和彦
取材協力/ロッキーオート
phone0564-58-7080

さて前号でお休みをいただいたZトッププロジェクトでありますが、その分今回はドド～ンとその優良進行ぶりをご覧いただきましょう。

まずは車体。可能な限りバラして各部に補強を入れたボディは、ご覧のようにきれいなレモンイエローにオールペンされました。仕上がって見ればふつうのS30のようですが、見えない部分にチャンネルを入れたり、バーを追加するなどして確保された強度は想像を絶するもの！ 本格的なレーシングカーにも匹敵するガッシリしたボディに仕上がっているのです。また、補強に伴って増加する重量を少しでも軽減するために

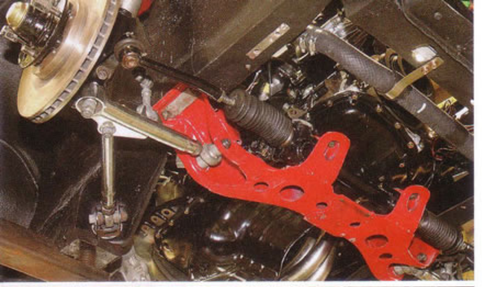
車体コンプリート完了 注目のエンジンも搭載だ！

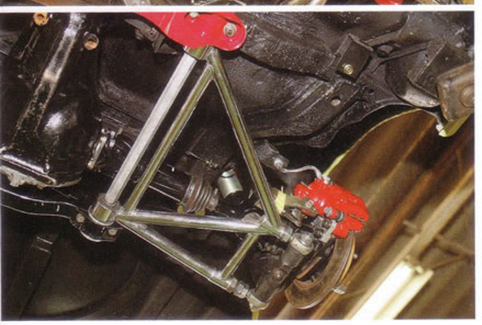


前後のサスはアラゴスタ製で、この車体のスペックに合わせて基本的なオリジナルセッティングが施されている。あとは実際の走行にあわせて細かいセッティングを煮詰めていくことになる。フロントブレーキはR32タイプM4ポットとφ310ディスクが装着される。

きれいに仕上がった車体からは、完成を前にして早くもハイパーマシンとしてのオーラを放ち始めていた。不思議なもので、デザインや大きさは変わらないのに、その驚愕の内容を聞くだけでS30がよりシャープで大きな車体に見えてくる。待望の完成まであともう少し！

RB30改のエンジンをマウントすると、そのヘッドはご覧のようにギリギリの高さとなる。もちろんシーマルのフォルムを崩すことなく、きっちりクリアランスを確保しての搭載だ。このあたりの技術にロッキーのエンジンコンバートに対する深い経験が活かされている。

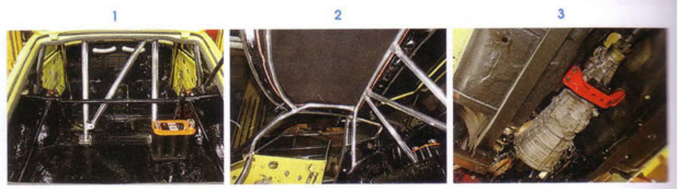




足周りには高級なワンオフパーツがふんだんに組み込まれている。レーシングシーンで見る一切の無駄を省きながらも確かな強度を確保する機能美に満ちたアーム類は、限りなくリジットに近い状態で装着されていた。

ボディのサイドシル下面には補強のためにご覧のような太いバーとチャンネルが溶接されている。

VINTAGE AUTO STREET PROJECT "やるぜ、僕らのワンメイク!"



1.ハッチバックを開けたスペース、つまりはスペアタイヤが収納される部分も鉄板とパイプで補強が施された。いくら頑強なロールケージを組み込んでもこういったベースの補強を施さなければなんの意味もないからだ。ちなみにバッテリーもこの部分にリロケーションされる予定だ。2.アルミの8点式ロールケージはルックスも最高にカッコいい。安全性と補強を兼ねた機能部品なのだ。3.ミッションはR33のRB25DET用を搭載する。その巨体を納めるために、ミッショントンエルは大きく加工された。当然ながらプロペラシャフトもスペシャルメイドだ。クラッチはOSのスーパーシングルを採用しているという。

このコーナーのクルマをナマでご覧いただけます！

このZtopプロジェクトに興味のある読者に皆様に完成車を生で見ていただくチャンスがきそうだ。というのも、来る2008年5月17日と18日に東京ビッグサイトで開催されるイベント、ノスタルジックカーショーにてこのクルマを展示する予定なのだ！ もちろん本誌のブースも予定しているのでお楽しみに！

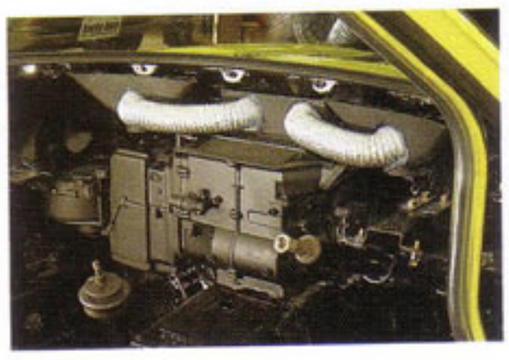
VINTAGE AUTO
STREET
PROJECT
"やるぜ、僕らのワンメイク!"

大人のクルマ好きがあらゆる状況で楽しめるそんなスーパーZが目標だ!

というわけで、完成までグッと近づいたZtopではありますが、クルマ作りに詳しい方ならおわかりのように、1台のクルマを仕上げるのはかたちになってからが大変なのであります。つまりこのZもエンジンセッティングはもちろんのこと、その強大なパワーや特性に合わせた足周りのセッティングには想像を絶する手間と時間がかかるのです。もちろんロッキーオートでは過去の実績を活かした独自のノウハウでそれらをクリアするべく作業を進めているのであります。また、このクルマのポテンシャルを存分に味わうためにサーキットでのテストも敢行する予定! もちろん本誌ではその様子もレポートするのでお楽しみに。

カーボンパーツの表情はマニア度高し。ボディ色とのコントラストもいい感じだ。

「最強のパワーを安心して楽しんでもらうには、それ相応のトータルパフォーマンスが必要なんです」とロッキーオート代表の渡辺氏は語る。確かに、このZの見えない部分にかけられた手間とノウハウには驚くべきものがある。常にエンジンパワーに勝るだけの車体を目指すという、ロッキーのポリシーがこのマシンにも息づいている。

大人のZにはオートエアコンももちろん搭載!

今車体の内装はほぼドンガラ状態。そしてその中に静かに鎮座するのはニッサン純正のオートエアコンユニットだ。オールシーズン快適に乗れてこそ大人のハイパフォーマンスカーであるという発想が、多くの大人をこの趣味に引きずり込んでいる。ロッキーではエアの噴出口やデフォッガー部分などをさらに進化させたシステムをこのZに採用している。クルマを作り込む上で他のエンジンやミッションといった主要部分と同じレベルでエアコンに対しても追求の手を緩めない。